

# 日本語学習者の「生涯にわたる言語学習」を支える日本語教育

山内 薫

大学時代及び大学という学習環境において、外国語という「ことば」を学ぶ意義とは何か。そして、学生の「ことば」の学びに寄り添う日本語教育／外国語教育とはどのような教育か。これらの問いを明らかにするため、筆者は、生涯教育論の概念及び「移動とことば」研究の視点を枠組みとし、「使えるあてのない外国語学習」(＝将来の就業あるいは学業において使用する可能性が低い「ことば」を学ぶこと)を行う日本語学習者の学習実態を「移動性」という観点から追究している。

1990年代以降、社会的、文化的、経済的活動のグローバル化が急速に進んでいる。グローバル化に伴い、地域内や国内から地球規模へと、人や文化が「移動」する手段が質量ともに増大し続けている。それにより、今後も人や物の物理的な「移動」や言語間の「移動」が活性化することが見込まれている。日本語教育学者及び文化人類学者である川上郁雄によると、現代が「移動」が常態とされる「移動する時代」であることを踏まえ、「国際間の双方向の移動や多地点間移動など」に研究視野が拡大されている(川上、2016)。また、社会学者のアンソニー・エリオット(A. Elliott)とジョン・アーリ(J. Urry)は、私たちが生きる現代社会を「モバイル・ライヴズ(mobile lives)」と呼び、人々は「移動の途上」にあると述べる(エリオット&アーリ、2016/2010)。現代社会に生きる外国語学習者もまた、「移動の途上」にいる。学習者は多様で豊富な移動手段を自ら選び、発展し続ける情報通信ネットワークを駆使し、それぞれに唯一の外国語学習環境をつくり出している。さらに、「移動」を通じた外国語学習において、学習言語のみならず、個々が有する複数の言語を活用し、他者とのやりとりを介して複数の文化を経験している。

グローバル時代の人生を歩む外国語学習者の「ことば」の学びを探究するためには、学習者の「移動性」を踏まえた「生涯にわたる言語学習」という視点が必要となる。生涯教育論の「生涯にわたり統合された教育(lifelong integrated education)」における「統合」の考え(森、1997)から「移動」を捉え直すと、「移動」を捉えるにあたっては、物理的あるいは言語間の「移動」に留まらず、個々の人生における時間的・空間的な「移動」の意味づけ、及びそれらの生涯における統合の様相に注目する必要があることがわかる。上述したような生涯学習と言語学習は、欧州評議会の言語教育理念においても関連づけられている。欧州評議会は、2001年にEUと共同で、生活のあらゆる場面での言語学習の機会を奨励するため「欧州言語年(L'Année européenne des langues 2001)」を実施するとともに、それを記念し9月26日を「欧州言語の日(La Journée Européenne Des Langues)」として制定した。「欧州言語の日」の生涯学習に関わる記述に着目すると、「生涯にわたる言語学習」が初等・中等教育機関、あるいは高等教育機関の「内外の環境(dans et en dehors du contexte)」で行われる行為と捉えられており、学校教育機関における学習と生涯学習が言語学習という文脈で結びつけられている。さらに、「欧州言語の日」においては、言語を学ぶ目的が「職業的ニーズや移動の動機、あるいは単に楽しみと交流」といった、言語学習者の外的・内的な動機づけに置かれている(Conseil de l'Europe、2014、筆者訳)。ここから、欧州評議会が示す「生涯にわたる言語学習」において、“生涯にわたり、時間的・空間的視点から、一

研究  
所  
概  
要月  
例  
研  
究  
報  
告新  
所  
員  
研  
究  
概  
要ラ  
ン  
ゲ  
ー  
ジ  
ラ  
ン  
ジ  
活  
動  
報  
告語  
学  
検  
定  
講  
座  
報  
告研  
究  
プ  
ロ  
ジ  
ェ  
ク  
ト研  
究  
業  
績

人ひとりの生活やそのなかの移動性を踏まえた上で営まれる行為が重視されていることがわかる。「移動性」という概念は、「移動」が個人の時間的な推移と空間的な動きを表す概念に対して、「移動」する存在である個々人がもつ特質を「移動性」ということばで表し着目する概念である。「移動性」に着目することにより、全生涯における学びという視点から大学時代及び大学という学習環境のなかで変わり、つくられていく学びの様相を掴むことが可能となる。

筆者はこれまで、「使うあてのない外国語学習」に取り組むフランスの国立大学の在籍生／専攻した修了生・退学者を対象とする研究を行ってきた。今後は、グローバル時代の人生を歩む外国語学習者の「ことば」の学びの実態、すなわち、どのような「ことば」の学びがどのような「移動」によりつくられるのかという問いを探究する。また、「使えるあてのない外国語学習」という観点は、国外の日本語教育のみならず、国内の第二外国語教育においても共通の課題であるため、今後は相互の教育実践を共有することにより、教育のあり方を捉え直したいと考えている。さらに、大学という教育機関で「ことば」を学ぶという営みの本質を追究するために、国内外の教育現場で外国語教育に関わる実践者及び実践研究者が、多様な教育機関における多様な外国語教育の共通点や差異を対照しつつ言語教育のあり方を議論しうる場をつくっていききたい。

### 【参考文献】

- エリオット、A.・アーリ、J. (2016/2010) 『モバイル・ライブズー「移動」が社会を変えるー』  
遠藤英樹 (監訳) ミネルヴァ書房 (Elliott, A. & Urry, J. (2010). *Mobile Lives*. London, UK: Routledge.)
- 川上郁雄 (2016) 『「移動する子ども」と日本語教育を考える』川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (2016) 『「移動とことば」の視点から見、個人にとっての日本語使用の意味と位置付け』2016年日本語教育国際研究大会パネル発表資料。
- 森隆夫 (1997) 「理念・理論・方法」森隆夫・耳塚寛明・藤井佐知子編 『生涯学習の扉ー理念・理論・方法』序章、ぎょうせい、1-8.
- 山内薫 (2019) 『「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした日本語教育ーフランスの日本語専攻学生の移動性に注目してー』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文。
- Conseil de l'Europe. (2014) *Qu'est-ce que la Journée européenne des langues ?*  
(<https://edl.ecml.at/Home/Whatisit/tabid/1760/language/fr-FR/Default.aspx>) (2021年1月6日アクセス)